

# 治療過程としてのカウンセリングにおける 人格変容の研究 一五一

——体験過程と有機体経験——

岸 田 博

## はじめに

カウンセリング場面を経験すると、どの来談者も多少人格の変化を経験する。特に成功例に於て著しい。これは、カウンセリングの過程に従って人格が変化するといい直すことを可能にする。飯塚銀次氏によると、常識的には統合性の拡大、内的葛藤の減少、生活に役立つ効果的能力の増大などの諸点へ向って変化することと、把えられている。

ロージャズは、カウンセリングによる治癒を、来談者が十分に機能する人間になることをその指標とした。カウンセリングの目的もまさにここにある。来談者にとって、以前には拒否され抑圧されていた概念が、治療過程を経ることで暗々裡に意識される。それは徐々に明確化される。遂には明確化されたものが、なんらの抵抗もなしに自己の中に同化されるに至るのである。この過程を通じ、自己概念は、治療以前には理想像としてしか存在し得なかったものに、ますます接近していく。この現象が生起し始めると、来談者は、その存在においてより社会化し、情緒面においてより安定し、自己受容と他者受容とを増大させ続ける。

この発端になるものは、自己概念の変化である。我々の行動は知覚のあることを既知の事実としている。行動の様式は知覚の様式によっている。自己知覚の様式についても、全く同様のことが考えられる。即ち、我々の行動は、自己知覚によって生じているのである。我々の行動がダイナミックであるのは、我々の自己知覚がダイナミックであることを示している。一般的に、この自己知覚がそのまま自己概念の中にとり込まれるか否かについては、論議の余地がある。即ち、自己知覚が自己概念中に全然とり入れられない時、何らかの変容という条件つきでとり入れられる時、その自己概念が問題になる。ここで、個人は自己知覚と自己概念との葛藤を感じ、何とかしようとする。この時の場面は不適応が感じられている場面である。彼は、この不適応場面を解消しようと行動する。この行動が、自己概念の安泰を計るものであれば、不適応場面は解消されない。この行動は、自己知覚の変化を招くものである必要がある。これによって、自己概念に変化が訪れる。

来談者の目的は、つきつめると、これである。しかし、初期段階においては、彼らは、このための処方箋を要求する。ここには、大きな、自己が変ることへの防衛と抵抗がある。即ち、自己が不一致の状態にあることに気付かない状態である。

自己知覚の変化の端緒は、思い切って自己をさらけ出した時、当然訪れる筈の攻撃、批難がなく、それが受容されたと感じた瞬間、その人に訪れる。これにより、自己概念は少しも損われず、反って豊かになっていくことに気付くと、その人はこれを一層おし進め、それを信じようとする。彼は自己の体験の過程があたりしくなってきたのを知覚する。

ここから、自己の有機体経験の再確認が行なわれ、これを基準として生きていこうとする姿勢が築かれていく。この流れを詳しく追っていくことは、非常に大切である。

## 目 的

本研究は、このような人格の変容を試みに測定せんとするものである。即ち、来談者の体験過程を追いつつ、彼の有機体経験を、あたかも彼自身におけるもののように再確認し、変化していくその照合枠を、過程を追って測定していこうとするものである。この測定を可能にし、またその信頼度を高めるために、以下の仮説をたてた。

### (仮説 I)

成功事例においては、面接の回数を経過するとともに、照合枠が消極的否定的なものから、肯定的積極的なものへと移動する

### (仮説 II)

照合枠の移動と軌を同じくして、価値観も、価値の条件が次第に減少し、代って有機体的評価の過程が生じてくる

### (仮説 III)

照合枠の移動・価値観の変化を測定することにより、その事例の成功度が判明する

### (仮説 IV)

成功か否かの判定は、過程尺度の評価値と、密接な関係がある

### 〔手続き I〕

上記仮説の検証を、一層信頼出来るものにするために、以下の基準で資料を選択した。

- ① 面接は5回以上続いて終了したものであること
- ② あらかじめ、過程尺度による評価がなされているものであり、結果、成功例として認められていること

この2項目の基準に合致する事例として、昭和 某 年5月より同年 12 月まで継続した(面接者岸田)、「女子大生R嬢」(面接回数9回、1, 4回を除く)を選出した。

### 〔手続き II〕

R嬢の事例は、以前に過程尺度によって評価がなされていたものではない。全然他の理由から、この事例が成功事例であるか否かを研究の必要上評価してあったのである。その評価方法は、本研究にも全くそのまま利用出来る。それは、

- ① R嬢の面接記録(テープ録音)を逐語訳に直す
- ② 最初、最終部分を考慮の対象外に置き、他の箇所を9等分する
- ③ 9等分の個々の箇所から、2分ないし3分の幅の会話単位を選択する
- ④ 会話単位を、2, 3, 5, 6, 7, 8, 9回のそれぞれに、9枚ずつ作成する(全部で63枚になる)
- ⑤ それらの紙片を順不同にして、過程尺度による評価に通曉しているカウンセラーに送付し、評価を依頼する

⑥ 評価は個別的独自のに行なわれ、一切の連絡や打合せを行なわない

⑦ 出来上がった結果を処理する

評価は、このような過程を経て行なわれ、処理された。

これとは別に、照合枠、価値観などにあらわれた体験過程を評価するため、以下の方法

を採用した。即ち、

- ① 面接記録を出来るだけ細心の注意を払って読む
- ② 来談者の発言にある体験の流れを注目し、心に止める
- ③ 来談者の体験の流れを非常に細かく拾いあげる
- ④ 拾い出したものを、来談者の体験の流れに従って、いくつか統合する
- ⑤ 統合したものが、如何なる体験過程を示しているかをつかむ

### 結果とその考察

仮説の検証という形をとりながら、結果として出て来たものを考察する。

#### (仮説Ⅰの検証)

これは、面接がすすむにつれて、来談者の照合枠が、否定的なものから肯定的なものへと移動していくということである

第1図をみると、否定的照合枠は、2, 3, 5 回目まで認められる。5 回目に8回の出現頻度がある。それ以後はない。一方、肯定的照合枠は2回目から9回目までに認められる。5回目までの出現頻度と、6回目以後をみると、6回目以後が若干多くなっている。肯定的照合枠が否定的照合枠よりも3回目において多いことは注目に値するが、2, 5 回目は、矢張り予期した通りであった。否定的照合枠が、5回目において最高で、以後出なくなったことは、何かがあることを教えてくれるらしい。移動の傾向の数値化を行なった所、 $\chi^2$  値 41.40, 0.001 レベルの値を得た。総じて、仮説Ⅰは検証された。

#### (仮説Ⅱの検証)

これは、価値観においても面接回の経過に従って価値の条件が次第に減少し、代って有機体評価の過程が登場するというものである。

仮説Ⅰで用いた思考様式と全く同一の方法で第1図を考察してみると、2, 3, 5 回目迄はそれぞれの3, 2, 3, の出現頻度で価値の条件が出現している。これが、6回目以後になると、全然現われてこない。これは仮説Ⅰの出現傾向と酷似している。有機体評価は、2回目から9回目まで、毎回認められる。しかも、6回目と9回目に多い。2回目からの傾向を概観すると、回を追って自己の有機体評価を信じ、それに安心している姿がある

第1図 レバランスの移動

面接回	レバランス		価値観**	
	否定的	肯定的	価値の条件	有機体評価
2	7	5	3	1
3	2	9	2	2
5	8	3	3	2
6	0	11	0	6
7	0	7	0	1
8	0	7	0	3
9	0	6	0	5
計	17	48	8	20

\*:  $\chi^2$  値 41.40 .001 level ( $d.f.=6$ )

\*\* :  $\chi^2$  値 12.88 .05 level ( $d.f.=6$ )

第2図 面接回評価算出の1例（評価者I）

2回目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均
	3.6	3.6	3.7	3.8	4.0	4.0	4.2	4.3	4.4	3.9

という帰結に達する。価値の条件と有機体評価の出現傾向を比べると、 $\chi^2$  値が 12.88で、0.05 レベルでの信頼度を有している。ここにおいて、仮説Ⅱも検証された。

#### （仮説Ⅲの検証）

これは、照合枠の移動と価値観の変化とを測定すると、その事例が成功事例か否かが判明する、ということである。

第1図によって照合枠の変化をみると、自己に否定的な照合枠で物に当ることが減少し、代って、自己に肯定的な照合枠で物に当ることが増えてきている。

自己肯定的なものは、その行動特徴として、物に積極的能動的に当り、そのあるがままの姿で物を見る傾向が多いことを示すのである。一方価値観の変化をみると、幼時から、いろいろの形でとり入れられた価値（価値の条件）による判断が減少し、代って、自らが物に当り、自らの体験過程を通して、ひとつひとつ確認しながら、即ち、自己の有機体経験によってひとつひとつ確認しながら、自己個有の価値観を形成していく過程が出てきている。これは、よりよく過応し、能動的により十分に機能しつつ生活している人間の、基本的特徴を示している。

これら3つの要素から仮説を判断すると、R嬢の事例は成功したと断定することが可能である。従って仮説Ⅲは検証された。

#### （仮説Ⅳの検証）

これは、成功か否かの判定は過程尺度の評価値と密接な関係がある、ということである。

ここで、仮説のⅣ検証に先立って飯塚銀次氏編の過程尺度によるR嬢の面接過程の評価値算出方法を述べる。

3人の評価者、（評価者Ⅰ：東京家政大学 増田実氏、評価者Ⅱ：東京農業大学 飯塚銀次氏、評価者Ⅲ：筆者）によ、て、それぞれ独自になされた評価結果を集計した。第2図に、評価者Ⅰの、第2回目の面接回9単位の評価値と平均値が示されてある。他の評価者もこれと同様に評価し、平均値を算出した。3評価者の評価値を持ち寄って、平均し、その回の評価値とした。第3図に3評価者の第回2目の平均値が、3.9、3.4、3.5と示されており、その平均値が3.6となっている。3回以後9回目まで、全てこのようにして平均値算出を行ない、第4図のごとき結果を得た。また、これら評価者間の3評価傾向の相関度をとってみた。それは第5図に示した。第4、5図によっても分るように、3者とも、きわめて類似の傾向で評価していることがわかる。事例が成功裡に終了したか否かは、過

程尺度の基準によると、評価値5.6以上が成功例となっている。これによって、R嬢の事例を判定すると、この事例は成功例ということになる。

仮説Ⅳの検証は、この前提があって、はじめて確固たるものになる。即ち、レハランスの移動が著しければ著しい程成功する

第3図 面接回評価値算出の1例

（3評価者の場合）

	評Ⅰ	評Ⅱ	評Ⅲ
2回目	3.9	3.4	3.5
平均	3.6		

第4図 面接過程の評価値算出一覧

	評 I	評 II	評 III	平均
2	3.9	3.4	3.5	3.6
3	4.5	4.5	4.5	4.5
5	4.4	4.1	4.0	4.2
6	5.1	5.1	5.2	5.1
7	4.9	4.8	5.4	5.0
8	5.6	5.7	5.6	5.6
9	6.7	6.4	6.2	6.4

第5図 評価傾向の相関

	評 I	評 II	評 III
評 I		.96	.93
評 II			.95
評 III			

ことが仮説Ⅲで検証されたが、レハランスの移動、価値観の変化のみで、勝手に成功例と決めてしまうには、未だ疑問点が残る。それは、誤びゅうが混入する恐れがあるからである。

レハランスの移動の評価傾向の信頼性をみるために、過程尺度の評価値を参考に見てみる。評価値が4.5に達しない2回目と5回目とでは、否定的照合枠、価値の条件の出現度も大である。4.5になると肯定的照合枠、有機体評価も多く出てくる。この段階では両向的という事が出来る。否定的照合枠と価値の条件づけは、5段階以上の評価値になると、出現しなくなる。肯定的照合枠、有機体評価のみが、6, 7, 8, 9回目に認められる。

照合枠、価値観のこのような変化の傾向は、過程尺度とどのような程度の密接さで関連性を有しているかについて両方の評価値の相関度を計った。その間にピアソンの相関度0.78, T検定値  $P > .05$  の数値を得た。ここにおいて、個別的考察からも、数値からもこの2つの相異なる評価傾向の間に関連性が高いことが分った。よって仮説Ⅳは検証された。

### ま と め

1. ロージャズの来談者中心療法によって面接を行なっていくと、成功例は必ずレハランスの移動が顕かにあらわれること。
2. 体験過程を通して、自己を肯定的、積極的に見、有機体の体験をより一層信頼していこうという姿があること。
3. より統合された、より十分に機能する人間になっていきつつあるか否かは、面接時のクライアント発言を、ていねいに追っていくと明らかになること。
4. レハランスの移動は、それを明白に示す言葉の単位を抽出することにより、数量化が可能なこと。
5. 数量化のための抽出方法に多少の熟練、通暁が必要になっている(残念ながら全くこの通りである) こと。
6. 体験過程における有機体経験が肯定的に働けば働く程、その個人はより統合された、機能できる人間へと、パーソナリティを発達させているということ。

### 引用・参考文献

1. 飯塚銀次: 昭和45年; プロセス・スケールのイクザンプルスの研究; 相談学研究, Vol. 3, No. 2.

2. 飯塚銀次：昭和 47 年；カール・ロージャズの人間有機体説；相談学研究，Vol. 5, No. 2.
3. 飯塚銀次：昭和 48 年；人間探究と創造性の開発；高陵社書店.
4. 飯塚銀次・岸田 博：昭和 45, 46, 47 年；体験過程と有機体経験の研究（照合枠の転移）；日本応用心理学会第 37, 38, 39 回大会.
5. 岸田 博：昭和 43, 46年；治療過程としてのカウンセリングにおける人格変容の研究；相談学研究，Vol. 2, No. 1., Vol. 5, No. 1.